V 総合討論総括

司会　今西錦司（岐阜大）

今回の研究会において，hominization という用語に関する議論がなされました。例えば，渡辺仁氏は「人類以後の進化に hominization という語を用いる方がよい」という提案をなさいました。これは，人類の進化は一般生物の進化と切り離して考えた方がよいとする意見であります。勿論，文化出現以後も進化と呼んでさしつかえないわけですが，生物的連続という立場からいたしますと，一貫して，人類以前から続いている人類進化というものを，現代も含めて取り扱う方がよろしかろうと考えます。すなわち，この hominization 研究会においては，*Hominidae* になる或いはなってからの進化一般を問題にすべきで，*Homo* になってからだけだとか，*Hominidae* になるところだけに限定する必要はないと思います。

人類進化を概括してみますと，ところどころに節があることがわかります。発展段階説をとる人達は，そこに段階を設定するのでありましょうが，いずれにしろ節があります。例えば，直立二足歩行・道具使用（現在どちらが先行したかは明確でないが，わたくしは道具使用を先に考えている）・大脳化・言語・農耕などが挙げられます。こういう節を中心に，今後も hominization 研究会で検討していったらよろしかろうと思うのであります。

さてここで，今回の研究会において発表討議されましたことをまとめてみたいと思います。直立二足歩行の問題は，現状ではまだまだのようであり，むしろ道具使用の方の問題点が明瞭になってまいりました。渡辺仁氏の方から stone-tool の前段階として bone-flake-tool を考えた方がよいとの提案がなされ，大体皆さんの同意が得られたように思います。今後の問題としましては，bone-flake-tool から stone-tool への発展が何によってなされたかを追究せねばならないでしょう。道具一般の使用に関しては，人類が宿命的に負わされたものとしての歯の退化という契機を考えたらどうかと，わたくしは思います。火の使用なども，最初は防寒が目的だったかもしれないが，調理に転用されることによって歯の弱さをカバーしたものと考えられます。

大脳化については，時実氏が欠席されましたので，今回はふれられませんでした。

言語の問題は，昔から提起されながら，実りが少ないようであります。森氏のニホンザルのコミュニケーションに関しては，ニホンザルからはヒトの言語の起源はつかめないという伊谷氏の指摘がすでになされており，この点対象をチンパンジーにしてやって欲しいと思います。Gardner の実験については，チンパンジーの能力の潜在性を開発したということで評価されますが，野生状態でどうかということがまだ分りません。実験の展開としましては，成体のチンパンジーの身振り言語がどうかを追究して欲しい。これは，言語の修得がオトナからかコドモからかに結びつくわけで，わたくしはオトナからであろうと考えております。ニホンザルの場合，生活様式の改変がコドモによってなされる例がよく見られますが，反対の場合もあってよいのではないか。ヒトのコドモに関しても，助詞の用い方の発達などの研究がなされており，言語の問題は，発達心理学やもっと広いベースを含んで追究する必要がありそうです。

社会進化の問題について，川村氏から「これからは社会の進化といわず社会性の進化と呼ぶことにする」という自己批判が出されましたが，これに対しては異議があります。川村氏は，社会は実体でないかもしれぬと考えておられるようですが，わたくしの *Specia*（種社会）はあくまで実体概念であります。外国では個人を主とする故に，社会進化などというものを受けつけぬ風潮がありますが，日本はそうでない。個と全体は不離不即の関係にあるといえましょう。

今回の研究会の概括はこれぐらいにして，hominization を考える場合に，今後問題にして欲しいと思うものの一つは，平行進化であります。進化には環境への適応では割り切れぬもの（あえて *Orthogenesis* とはいわないが）があります。例えば，大脳皮質の発達などはウマでも見られるし，哺乳類一般の特徴ともいえるでしょう。人類になってからでも，環境や系統と別のところで平行進化的な現象が考えられるのではなかろうか。

（再録文責　渡辺　毅）